

## ◇ 国 語

国 6-1～国 6-19 まで 19 ページあります。

「国6-1」から「国6-10」

著作権保護のため非公開

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

本に接する書店という空間について考えてみたい。といつても、観察するのは「リアル書店」の現状や見通しではなく、パソコンやインターネット書店のような、ひとつの装置としての書店の形式だ。

本が電子書籍の登場で「紙の本」になったように、書店もいつの間にか頭に「リアル」を戴くことが増えている。しかしバーチャル対リアルのようなしかたで書店を対置すると、「リアル書店」は圧倒的に分が悪い。本を有償で手に入れる単純な機能だけを比較すれば、インターネット書店のほうが便利で確実、ということになる。書店に行つて本を買うのは、時間や交通費の無駄だという意見も幅をきかせている。そこでの反論は、アナログ・ローテクならではの良さといったものになるが、愛書家的な趣味の問題におきかえられてしまい、積極的な評価がされにくい。

「紙の本」の場合は、もう少し支持が得られやすい。所有したり使ったりする中で「モノ」としての書物の価値が比較の実感されやすいし、紙や印刷やページや冊子体であることが、道具ないしは技術として、デジタルとの比較に耐えるからだ。ならば、「リアル」書店についても同じような視点で、道具や技術として観察してみたらどうだろう。ここでいう書店の形式とはそのようなもので、たとえば、パソコンや iPad のキーボードやディスプレイ、もしくはアマゾンの検索エンジンにあたる部分を書店のなかに探し出し、それがどのようなものであるかをみつける、という試みだ。

さしあたって考えたいのは書棚や平台とよばれる陳列台である。

書棚と平台はそれぞれ異なる機能をもっている。さらにライレキをみると、書店のなかには実にさまざまな要素が混ざり合っていることや、それらが複合して人と出版物との接点をつくりだし、また出版物そのものを呼び込むことが確認できる。前置きはこのくらいにして、ではさっそく書棚から始めよう。

日本の書店で今のような書棚が使われるようになったのは、明治半ばごろのことと推定される。いかにアマゾンが便利でも、「本はやっぱり書店で手にとって見たい」と話す人が少なくないが、そんなふうに書店で本を手にとって見られるようになった

のは、ここ二百年ぐらいのことだ。

それ以前の書店は、ほかの商店と同じく畳や板敷きの坐売りだった。大店や大衆的な<sup>註</sup>地本<sup>註</sup>を売る店では、表から見える場所に本を並べたが、そうでないものは積み重ねた状態で棚にしまわれ、客が店の中まで入って、勝手に品物を手にとるということはあまりなかったのである。客は希望のものを店員に注文し、店員が棚から出してくる。和本は背表紙がついておらず、紙も柔らかなので棚に立てて並べるには適さない。

これが現在のよう形になるのには、店舗と商品と両方の変化が必要だった。すなわち土間と洋本であり、いずれも西洋式である。土間式の店舗は輸入品を扱うものが東京や横浜ではじめ、明治33(1900)年に三越(三井呉服店)が採用したあたりから、普及に<sup>e</sup>拍車<sup>e</sup>がかかったものと思われる。同じころ、新しく出される本はほとんど背のついた洋本になっていたようで、明治30年代に、東京の丸善や東京堂、札幌の富貴堂、久留米の菊竹金文堂など、土間に書架を並べた書店が複数あらわれている。

大正2(1913)に出された書店開業の手引書を見ると、これから書店を始めようとする人に向けての標準的な店舗構成が示されている。

<sup>三</sup>このような書店では、客は店員が出してくる本を待つのではなく、自分で店の中に入って選ばなければならない。それまでの坐売りでは、おもに店員とのコミュニケーションを中心として本を手に入れていたのが、書棚を相手に、棚とのコミュニケーションを通じて、本と出会うことになったわけである。

書棚のある書店の中身は複雑だ。本の種類は積まれているときより数倍多く、書名や著者をあらかじめわかっているとは限らない。そこで、棚とコミュニケーションするためのツールが必要になる。多くの本のなかから客が自分で本を選ぶには、棚が選べるような配列になっていることが必要で、分類や体系というものが不可欠なのである。したがって、書店のなかに入っていく客は、自分の関心領域を書棚という全体性のなかで知り、その配列によって構造化していくようになる。

図書の分類は、知識を体系化するテクノロジーとして、図書館とともに古くから用いられてきたものである。商業流通には地

域性や客層があり、人気のある分野がふくらんで細分化する、という特性もあるので、図書館のように全体を網羅するわけではない。しかしながら、それもまた産業者たちによる新たな構造化であり、そのように読者とキャッチボールをしながら、構造をデジタル化する空間として、近代書店や書棚は機能したのである。そしてその構造はしばらくのち、家庭のなかにも書棚として持ち込まれるようになる。

家のなかに書棚が置かれるようになったのはいつなのかは、定かではない。少なくとも近代の初期には西洋家具は高級品であり、ありあわせの棚は別として「書棚」を持っている個人はさほど多くはなかったと思われる。明治も後半になると、読書誌などに書棚の広告がケイサイ<sup>1)</sup>されているが、一般家庭に既製品が普及するのは、大正後半ごろと推定される。

家に書棚がある、という状況を考えてみよう。書店の棚は陳列用で、一定の広がりをもっている。家の棚は収納家具だが、複数の場所から、自分の関心や必要に応じて集めてきたものが凝縮された、ひとつの世界でもある。さまざまな場所にブンサン<sup>2)</sup>していたものを自分が集めなおし、「自己」という新しいジャンルを作って、私的な空間に再現しているようなものだ。大げさにいえば書棚は自分の分身であり、家のなかに書棚があることは、その分身と常に向き合っていることを意味する。

家族がいれば、その世界は家族とも共有される。置き場所によっては来客が目にする機会もある。他人の家や職場を訪問して、つい置いてある書棚に目をやってしまった経験がないだろうか。雑誌などではしばしば有名人の書斎の写真を載せたりするが、そこに対する好奇心は、本の並びにあらわれるその人の内面や知的関心に向けられている。

他者への意識は、自己を他人の目にさらしたくないとか、逆によく見せたいという気持ちを生じさせることにもなる。自分の本棚が人に見られるのは恥ずかしいと感じたり、ミーハーな本を隠したりしたことはないだろうか。でなければ、知的そうに見える本を目立つところに並べ替えたりしたことはないだろうか。書棚が自己であるために、それを使った自己の演出も可能なのだ。

この点について、昭和初期の円本<sup>3)</sup>と書斎との関係から論じたのが、塩原亜紀の研究である。円本のおもな読者層である新中間層向けの住宅では、玄関脇に応接間兼書斎スペースをおく、というデザインがひとつテンケイとしてあった。塩原はこれに注目

し、接客と主の知的活動とが行われるこのスペースに、両方の要素を満たす円本全集がうまくあてはまったのではないかと考察している。

イ、全集というパッケージは書棚を連想させる。実際、日本の広告にはたびたび書棚のイメージ写真が使われており、全巻購読者には書架プレゼントも企画されている。書店空間で書棚を通じて提供された体系的な構造は、個人空間の書棚を通してそれぞれの世界となった。それが他者と共有されることで、今度は「他者に見せる（または見せたくない）自己としての書棚」というものも生まれた。そうしたカンテン<sup>E</sup>からみると、私的な空間のなかでの円本のパッケージ性は、より現実感のあるもの感じられるかもしれない。

（柴野京子『書物の環境論』より）

注一 地本 …江戸で出版された本。主に大衆的な絵入り小説である草双紙を指す。

注二 円本 …定価が一冊一円均一の全集。大正末から昭和初期に流行。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ライレキ

- ①伝説にユライする地名
- ②ラクライによって停電になった
- ③先人の偉業をライサンする
- ④原稿執筆をイライする
- ⑤多数派にフワライドウする

17

B ケイサイ

- ①法案をサイケツする
- ②サイゲンなく続く話
- ③精巧なサイクをほどこす
- ④荷物をセキサイリヨウ一杯に積む
- ⑤自分のサイカクで生きていく

18

C ブンサン

- ①別表をサンショウする
- ②絹織物をサンシュツする
- ③彼女の意見にサンドウする
- ④サンセイウの被害が深刻だ
- ⑤見知らぬ町をサンサクする

19

D テンケイ

- ①城のテンシユカクを眺める
- ②その意見にはガテンがいかない
- ③引用する時はテンキョが必要だ
- ④詩をテンサクするのは難しい
- ⑤捜査にシンテンが見られない

20

E カンテン

- ①想像力をカンキする
- ②天体をカンソクする
- ③カンカツする場所が変わった
- ④山をカンツウする道
- ⑤船のカンパンを波が洗う

21

問二 空欄

ア

イ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ①したがって
- ②すなわち
- ③やがて
- ④もしくは
- ⑤いっぽう

22

イ

- ①たしかに
- ②けれども
- ③反対に
- ④とはいえ
- ⑤あるいは

23

問三 傍線部(a)・(b)・(c)の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 対置する

- ①行為の目標となるものをおくこと
- ②割り当てられた位置に物や人をおくこと
- ③ある物とある物が向かい合って一組になっていること
- ④二つの物事を照らし合わせて比べるようにおくこと
- ⑤ある物をほかの物におきかえること

24

(b) さしあたって

- ①じっくりと
- ②いまのところ
- ③必要に応じて
- ④立ち止まって
- ⑤様々な角度から

25

(c) 拍車がかかった ①予想される事態に対して必要な処置をとること

(拍車をかける) ②自分で判断して処理すること

③実現のためにあらゆる手段を試みることに

④状態が急に変化すること

⑤物事の進行を一段と早めること

26

問四 傍線部(一)「それ以前の書店」の説明として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①土間や書棚はなく、畳や板敷きの坐売りで本を売っていた。

②客は店員とのコミュニケーションを介して本を手に入れていた。

③客が本を探しやすいよう、本は分類して書棚に立てておかれていた。

④大店や地本を売る店以外は、本を積み重ねた状態で棚にしまっていた。

27

問五 傍線部(二)「このような書店」とはどのような書店か。説明として当てはまらないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ①客が本を手にとって、買いたい本を選ぶことができる書店。
- ②どの客の要望にも対応するために、本を網羅的に集めて売っている書店。
- ③書棚の本が分類され、体系的に並べられている書店。
- ④店の中は畳や板敷きではなく、土間があってそこに書架が並べられている書店。

問六 傍線部(三)「大きさにいえば書棚は自分の分身」の説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ①家の書棚の様子は、その人が読書家であり、温厚な人物であることを示しているから。
- ②家の書棚を見れば、その人が自分を他者により良く見せようとしていることが分かるから。
- ③家の書棚の様子は、その人がどんな風に本を扱っているかを明確に示しているから。
- ④家の書棚を見れば、その持ち主がどんなことに関心を持っているかが分かるから。

問七 和本と洋本について、正しく説明しているものはどれか。次の①～④の中から最も適切なものを一つ選べ。

30

- ① 和本は書棚に立てて並べるには適さない形態である。
- ② 和本には固い背表紙がついている。
- ③ 和本が登場したのは明治30年代以降である。
- ④ 和本はかたい紙が使われているので重たい。

問八 本文の内容と一致するものはどれか。次の①～④の中から最も適切なものを一つ選べ。

31

- ① 明治半ば以降の自宅の洋風化とともに、土間のある書店は少しずつ数を減らしていった。
- ② 「紙の本」の価値は、「リアル」書店の価値以上に実感されにくい。
- ③ 書店に書棚や平台と呼ばれる陳列台が登場したのは、明治半ばごろと推定される。
- ④ 「リアル」書店の場合、店員の本に関する深くて広い知識が、アマゾンの検索エンジンと同じ役割を果たしている。